

新 私の 医局時代

64



新生病院歯科口腔外科医長

北村 豊

(神奈川歯科大 75年卒)

昭和五十年の春、私の信州での生活の第一夜は、松本歯科大学病院の病棟で始まった。私が入居するはずになっていた借家は工期の遅れでまだ完成しておらず、空いた病室より通うこ

ととなった。とりあえず必要な最小限の荷物は病室に持ち込んだが、時おり必要となる書籍などは大家さんの梨畑の中にある小さな納屋の中の大きな荷物の山より発掘してくる必要がある

た。

入局した当時の第一口腔外科では、大学創立後の期間も短くて医局員の数も少なかったことから、当直のローテーションの中に教授や助教教授も入っておられ、研修の為に一緒に寝泊まりした新入医局員の私たち

るまで全てが当直医の仕事であった。そんなある日、浴衣をまとった妙齢の美女の臀部に筋注をする事になり、伏臥位になつてもらつたところ、「私、下ばきを着けてないんです。」という言葉が返ってきた。慣れない上にうぶであった私

したものであった。主として母校の神奈川歯科大学で行った学位論文の研究中は、家を空けることも多く、当時幼かった長男から「お父さん、今度いつお家にくるの？」と人が聞くと誤解を招きそうな発言も聞かされたものである。

“うぶ”だった頃

美女への筋注に赤面

は、極度に緊張した夜を過ぎたものであった。業務に慣れた頃から病棟の一人での当直に私も組み込まれるようになったが、その当時は入院患者も少なかったことから看護婦の夜勤は無く、点滴セットの組み立てから静注や筋注に至

は、妙齢の美女・臀部・下ばきという三つのキーワードに狼狽をされたのか、針のキャップをベッドの上で落としてしまった。あらぬことか、そのキャップはこ

大学の医局には十九年間在籍したが、その中には休職して赴任した三年間のマレーシア先住民病院での医療活動と、近畿大学形成外科への短期国内留学が含まれる。井の中の蛙大海を知らずであった私が外の社会、とくにジャンルに住

は、極度に緊張した夜を過ぎたものであった。業務に慣れた頃から病棟の一人での当直に私も組み込まれるようになったが、その当時は入院患者も少なかったことから看護婦の夜勤は無く、点滴セットの組み立てから静注や筋注に至

は、妙齢の美女・臀部・下ばきという三つのキーワードに狼狽をされたのか、針のキャップをベッドの上で落としてしまった。あらぬことか、そのキャップはこ

大学の医局には十九年間在籍したが、その中には休職して赴任した三年間のマレーシア先住民病院での医療活動と、近畿大学形成外科への短期国内留学が含まれる。井の中の蛙大海を知らずであった私が外の社会、とくにジャンルに住

む先住民と共に過ごすことにより得られたものは、私にとつてかけがえのないものとなっている。

海外医療協力をライフワークとする自称「ジャンゲルの貴公子」も新生病院の看護婦さんには形なしで、「ジャンル小僧」と変格活用されている次第です。

……

著者略歴(きたむら・ゆたか) 1948(昭和23)年12月5日生まれ、50歳。75年神奈川歯科大卒。同年松本歯科大第一口腔外科入局。マレーシア国立先住民病院、松本歯科大口腔外科助教を経て94年から新生病院に勤務。

(次回は安曇総合病院歯科口腔外科医長の中篤哲先生の予定です)